

—論文—

## ヤオ族の評皇券牒 (Ⅱ) ——槃瓠神話と移動経路を中心に——

田畑 久夫

Yao Passport Píng Huáng Chuan Tieh (Ⅱ)

— Focused on the Ban Ho (a dog) legend and their migration routes —

Hisao Tabata

In Part I, We talked about the history and distribution of the Yao tribe with Yao Passport Píng Huáng Chuan Tieh as a background. In Part II We studied Ban Ho legend which has been handed down in one of the subgroups of the Yao tribe, focusing on three points such as its forming process, characteristics and later changes and analyzed the legend by using historical materials of the Chinese history books. According to Ban Ho legend the ancestor of the Yao tribe is a dog called "Ban Ho". Because the dog saved the emperor at a crisis, he was given the emperor's daughter as his wife and had 12 sons and daughters. The legend tells these 12 children are the ancestors of the Yao tribe. Ban Ho legend occupies the central position in Píng Huáng Chuan Tieh. As the Yao tribe owned this document, they were regarded as the tribe connected to the emperor, though in the world of mythology, and obtained the living rights, for example they were guaranteed their living in the mountains of the various parts of the country.

### 3. 槃瓠神話とヤオ族

ヤオ族は西南中国最大の高原で、熱帯カルスト地形が卓越する雲貴高原の山間部を中心に広範囲に分布・展開する少数民族である。ヤオ族の特徴の1つに、ほぼ同様に雲貴高原を主体に分布するミャオ族と共に、国境を越えて南下し、インドシナ半島北部の山岳地帯にまで分布しているという移動性があげられる。ヤオ族の場合、国境を越えて移動するのは前稿(田畑 2005: 7-10)で論じた。「盤ヤオ」族に代表される、過山ヤオ族と総称されるヤオ族の分派集団(支系)のみである<sup>1)</sup>。

前稿では、ヤオ族の歴史を主として正史や地方志などを中心とする漢籍史料で検討した後、居住地域が広範囲にわたっていることなどから、日常的に着用している民族衣裳の形態や使用している方言を主体とした言語系統などにより区分される分派集団(支系)の特徴、さらにはかかる分派集団ごとの主要分布地域に関して、論を展開した。かように、本稿の主題である評皇券牒の分析を行なう前に、ヤオ族の歴史や分布状況をやや詳細に論じたのは、従来とりわけ社会主義体制を採用することになった中華人民共和国(1949年10月成立)以降、ヤオ族の最大の

集結地区である雲貴高原東端に位置する広西壮族自治区北部の山間部を筆頭に、中国に分布・居住するヤオ族居住地区は、外国人が自由に立ち入って調査や研究を実施することは勿論のこと、観光することすら禁止された、対外「未開放地区」に指定されたことと、大いに関連がある。

というのは、ヤオ族は漢字を使用することからも、とくにわが国の研究者間ではその名前が知られ高い関心もたれていた。しかし、かような政策の結果中国国内でのフィールドサーヴェイを行なうことができず、フィールドサーヴェイに基づく調査・研究は、移動先の1つであるタイ北部（白鳥編 1978など）やラオス北部（岩田 1960など）の山岳地帯に居住する集団に限定されていた<sup>2)</sup>。そのため、ヤオ族に関する認識についても偏見がみられた。

すなわち既述のように、中国より南下してインドシナ半島北部の山岳地帯にまで進出したのは、ヤオ族の分派集団の中でも「盤ヤオ」族を中心とする過山ヤオ族と総称される分派集団のみであった。それ故、ヤオ族といえば、「ミィエン」あるいは「ユーミィエン」と自称する「盤ヤオ」族のこととされてきた。しかもとくに日本人研究者にとって好都合だったのは、「盤ヤオ」族が所属する過山ヤオ族だけが、漢字で書かれた評皇券牒に代表される史料を所有していたのであった。

以上の論点はこれまでのわが国のヤオ族研究において明確に論じられることが少なかった。それ故、前稿においては、かかる論点を強調する目的もあり、やや詳しくヤオ族の歴史と分派集団の特徴および主要居住地域に関して論じたのであった。再度繰り返すことになるが、以降展開する評皇券牒に関しては、分派集団の中でも「盤ヤオ」族に代表される過山ヤオ族だけが所有している漢字で書かれた文書なのである<sup>3)</sup>。

## 1) 槃瓠神話の成立過程

前述したように、ヤオ族の分派集団の中でも過山ヤオ族と総称されている集団のみが、評皇券牒を筆頭に、漢字で書かれた文書類を所有している。かように、過山ヤオ族と呼ばれる分派集団のみが、このような文書類を所有することになったのは次のような理由が考えられる。

すなわち、過山ヤオ族は他のヤオ族の分派集団と異なり、従来より実施してきた焼畑農業や狩猟などを行ないながら、山中を移動し続けてきた。周知のように焼畑農業は、山腹斜面に生えている樹木などを伐採し、乾燥させた後火入れを行ない、その結果生じた灰を唯一の肥料として利用する、原始農耕である。その特色は、一般に掘り棒と呼ばれている先端の尖った木製の棒だけを農具として使用する点と、数年経過すると肥料としての灰の地力が衰えることと、除草を実施しないため雑草が新たに成長を開始することから、焼畑耕地が使用不可能になることである。そのため過山ヤオ族は、周辺の山中に新しい焼畑耕地を求め、移動せざるを得なくなる<sup>4)</sup>。狩猟に関しても同様である。つまり特定の場所で長期間狩猟に従事していると、猟場では狩猟対象となる鹿や熊をはじめとする大型野生獣が減少する。そうすると、新しい猟場を求めて移動せざるを得ない。

過山ヤオ族は上述したような生業形態を踏襲し続けてきた。その過程において、他の分派集団よりも漢字を使用する漢民族と接触・交渉する機会を多くもつようになったと看做される。とりわけ過山ヤオ族は、製茶および製紙製作の技術に優れ、これらの製作を副業的に行なってきた。すなわち、かような製品を近くで開催される定期市などで販売するためにも、中国語を学習し、漢字を修得する必要があった<sup>5)</sup>。

さらに、新しい耕地や猟場を求めて山中を移動する場合、辺地に位置する深山といえども自

由に移動することができなかつたし、ましてや無断で焼畑耕地などを造成することも不可能であった。すなわち、山林には所有者が存在したからである。

そこで、過山ヤオ族は、各地の深山を自由に行動でき、かつ適当な場所で焼畑耕地などを開くことができる許可書や、祖先祭祀や冠婚葬祭に関する習俗を行なう際に唱えられる祈祷や呪文に類する文書類の必要を強く感じるようになった。前者の許可書は、当時の皇帝が承認を与えた免許状的な性格を有する文書で、一般に評皇券牒あるいは過山榜と称されている文書がこれに該当する<sup>6)</sup>。一方、後者の祖先祭祀や冠婚葬祭に関する文書は、家先単、超度表、洪恩赦書、女人唱歌などと各々呼ばれているものである。

とくに過山ヤオ族は、既に指摘したように移動生活を余儀なくされた。その関係から特定地域や地区に集中して分布・居住する傾向がみられる、他の多くの少数民族やヤオ族の分派集団よりも、自らの民族（分派集団）としてのアイデンティティを全面的に押し出す必要を強く意識していた。かような民族（分派集団）としての意識が薄らぐことの危惧を常にもっていた。そのためにも、自らの民族（分派集団）としてのアイデンティティを絶えず確認し、その中核となるものを求めた。それが評皇券牒の中心となっているヤオ族の祖である、槃瓠という犬を祖先とする槃瓠犬祖神話であったといえる（田畑 2004：74）。

槃（槃）瓠と称する犬が出現する最古の神話は、原形が戦国時代（BC475～BC221年）以前に成立した、禹の治水を助けた伯益の作とされる『山海経』<sup>7)</sup>にみられる。その「海内北経第12」の中に

有人曰、大行伯、把戈。其東有犬封国。郭璞<sup>8)</sup>注「昔槃瓠殺戒王、高辛以美女妻之、不可以子訓。乃浮之会稽東海中、得三百里地封

之…（中略）…是為狗封之民也」

（下線——筆者註）。

とみられるように、文中の郭璞の註記として槃瓠（下線部）という犬が登場してくる。しかしながら、『山海経』の記述に関しては、その信憑性が大いに問題ありとされている。

なお「槃瓠」に関しては、中国の天地創造神話の中に登場する「盤古」と同音である。それ故、ヤオ族の祖犬とされる「槃瓠」はかかる「盤古」からの借用ではないか、とも考えられる。天地創造神話では盤古は異なった2系統の天地創造神話の中心的人物＝神として登場する。

その第1は以下にみられるように、

天地混沌如鷄子、盤（盤の異字——筆者註）古生其中、歴八千歳、天地開辟、陽清為天、陰浊為地。盤古在其中、一日九変、神於天、経於地、天日高一丈、地日厚一丈、盤古日長一丈。如此万八千歳。天数極高、地数極深、盤古極長、后乃有三皇（下線——筆者註）。

〔三国〕徐整『三五歴紀』<sup>9)</sup>

と記されているものである。はじめ天と地はまるで鷄の卵の中味のように混沌としていたが、その中から下線部にみられるように盤古が生じたという、天地分離神話に登場してくるものである<sup>10)</sup>。

その第2は、次の

首生盤古、垂死化身、氣成風云、声為雷霆。左眼為日、右眼為月、四肢五体、為四極五岳、血液為江河、筋脈為地理、肌肉為田土、発鬚為星辰、皮毛為草木、齒骨為金玉、精髓為珠玉、汗流為雨経、身之諸虫、因風所感、化為黎毗（下線——筆者註）。

〔三国〕徐整『五運歴年紀』<sup>11)</sup>

と記されているように、盤古（下線部）が死去すると、例えば、吐く息は風や雲になり、左の眼は太陽にというように、巨人死体化生型の天地創造神話である<sup>12)</sup>。

かように原典の一部を引用した事例からも判明するように、ヤオ族の祖と看做される盤瓠と称される犬と同音の盤古は、漢民族の天地創造神話の中心的な役割を担う神であった。かかる事実は、神話上のこととはいえ、ヤオ族と支配者である漢民族とりわけ皇帝とのつながりが深いことを示唆するものといえよう。つまり、このような素地があったからこそ、盤瓠犬祖神話が成立したと看做せるのである。

『山海経』に次いで盤瓠が登場するのは、3世紀ごろの撰と考えられている魚豨の『魏略』である。しかしながら『魏略』は原本が既に散逸してしまっており、現在ではその断片しか知ることが出来ないが、幸いなことに盤瓠に関する部分は、北宋の太宗の勅に奉じて983年に李昉らが撰した『太平御覧』の中に引用されて残っている。そこには、

高辛<sup>13)</sup>氏有老婦、居王室、得耳疾、桃之、得物、大如繭、婦人盛瓠中、覆之以槃、俄頃化為犬、其文五色、因名槃瓠

(下線——筆者註)。

[北宋] 李昉ら撰『太平御覧』卷785

四夷部六槃瓠 廩君

と記されている。その大意は、高辛氏には年老いた女性がいた。王宮に住んでいたが、耳の病気にかかった。医者がこれを治療して繭ほどのある大きさのものを取り出した。それを女性は瓠(ひさご、ウリの一種)の種子を入れるざりの中に入れ、槃(大皿)をかぶせておいた。するとたちまちそれは犬に変身し、5色の毛なみがあった。そこでその犬を下線部にみられるように槃瓠と名づけた。このように、槃瓠と称する犬の由来を述べている。

上述した『芸文類聚』や『五運歴年紀』では、槃瓠は天地を創造したものとして登場するが、ここでは槃瓠を犬であると明確に述べている。しかし、槃瓠は一般の犬とは異なり、ここでも

皇帝につながるものとして現われてくる。この点は注目する点であると思われる。しかし、断片のみが残っているためか、その後槃瓠がどのようなようになったのかは不明である。

以上の『魏略』記載の槃瓠犬祖神話を補充するものが、東晋(317~420年)の干宝が撰した『搜神記』<sup>14)</sup>記載の槃瓠犬祖神話である。その内容は多少長い。しかし、槃瓠犬祖神話が評皇券牒の中核を占めていることから、評皇券牒を理解するにはより詳細に槃瓠犬祖神話を分析する必要がある。そこで最初にその全文を紹介し、検討を加えていくことにする。

高辛氏、有老婦人、居於王宮、得耳疾。歴時、医為挑治。出頂虫、大如繭。婦人去后、置以瓠、覆之以盤。俄爾頂虫乃化為犬、其文五色、因名盤瓠。遂畜之。時戎吳強盛、數侵邊境、遣將征討、不能擒勝。乃募天下有能得戎吳將軍首者、贈金千斤、封邑萬戶、又賜以少女。后盤瓠街一頭、將造王闕、王診視之、即是戎吳、為之奈何? 群臣皆曰:"盤瓠是畜、不可官秩、又不可妻、雖有功無施也"。少女聞之、啓王曰:"大王既以我許天下矣、盤瓠街首而來、為國除害、此天命使然、豈狗之智力哉。王者重言、伯者重信、不可以女子微軀、而負明約於天下、國之禍也"。王惧而從之、令少々從盤瓠、盤瓠將女上南山、草木茂盛、無人行跡、於是女解去衣裳為射豎之結、著獨力之衣、隨盤瓠升山、入谷、止於石室之中。王悲思之、遣住覓視、天輒風雨吟震、云晦、住者莫至。蓋經六年、產六男、六女。盤瓠死、后自相配偶因為夫婦。織績木皮、染以革實。好五色衣服、裁制皆有尾形。后母婦以語王、王遣使迎諸男女。天下覆雨。衣服褊褊、言語侏侏、飲食蹲踞、好山惡都、王順其意、賜以名山広澤、号曰蛮夷。蛮夷者、外痴内黠、安土重旧、以其受異氣於天命、故待以不常之律、田作賈販無関繡符傳租稅之賦、有邑君長

皆賜印綬、冠用獺皮取其游食於水、今即梁漢已蜀武陵長沙盧江都夷是也。用糝雜魚肉叩槽而号、以祭盤瓠、其俗至今、故世称赤髀横裙盤瓠子孫。

[晋] 干宝：《搜神記》

上文の大意は、冒頭にみられるあるものがたちまち5色の毛並みを有する犬に変身したという箇所までは、前述の『魏略』記載の神話と2・3の相違が認められるがほとんど同文である。但し、『魏略』では、犬に変身する以前虫であったと特定しておらず、たんにもののみ記されている。その後は、『搜神記』では要約すれば次のように続いている<sup>15)</sup>。

すなわち、当時戎呉の勢力が強大で、たびたび辺境に侵入してきた。王は幾度となく征伐を企てたが成功しなかった。そこで王は布告を出して、戎呉の將軍の首を取った者に、金千斤、戸数1万戸の領有権と娘（王姫）を嫁として与えると約束した。しばらくすると盤瓠が敵の將軍の首をくわえて王宮に帰ってきた。家臣は犬であるので褒美などを与える必要がないと注進した。しかし、娘が王者は言葉を重んじ、覇者は信義を尊重しなければならないと申し出たので、王は娘を布告どおりに盤瓠に嫁として与えた。

盤瓠は姫と共に南方の山地に向かい、とある石室の中に住むことになった。一方王は娘のことが心配だったので使者を送り、幾度も搜索させた。しかし、そのたびごとに風雨などの発生 of 異常気象が起こり、住み家としている石室にまで到達できなかった。6年後に娘は男女6名ずつの子供を出産した。その後盤瓠が死去したが子供たちは互いに相手を選び夫婦となった。また子供たちは、木の皮をつむいで織った布に、草の実で染色した着物を着ていた。その着物の色は、盤瓠の毛並み同様5色で、裁ちかたはどれにも犬の尾の形が付いていた。

その後、娘は都に帰り、石室での生活の様子を王に話した。王は使者を派遣して子供たちを王宮に迎えた。今回は異常気象が発生しなかった。子供たちは短い着物を着用し、言葉も通せず、かがんで飲食した。また彼らは山中での生活を慕い、王都での生活を嫌った。そこで王は、子供たちの要望に応じて、大きな山と広い沼を領地として与えた。そして彼らを蛮夷と称することにした。

子供たちは、中国人（漢民族）と異なる気質を盤瓠から受け継いだ。すなわち、外面的には愚かにみえたが、内面は悪賢かった。耕作や商業にも従事していたが、関所の通行手形や道中手形、さらには租税を納める義務もなかった。彼らが居住している村には朝廷より承認された族長がいた。族長がかぶっている冠はカワウソの皮からつくられていた。カワウソが泳いで食物を自由に取ることに由来するという。現在、梁漢、巴蜀、武陵、長沙、盧江の諸郡に住む蛮族はすべてこの子孫である。食事は米の粥に魚や肉をまぜて食べ、桶をたたいて盤瓠を祭る習慣をもつ。

『搜神記』は中国文学のジャンルでいえば、鬼神や超現実的な靈感などの怪奇現象を集めた説話小説で、志怪小説と呼ばれている。それ以前の小説と称されたものは、言葉通り「取るに足らない小さな話」で歴史の記述からこぼれた断片的な記録にすぎなかった。それに対して、志怪小説は知識人が意識的に小説を著わそうとした最初の作品とされた。竹田晃によれば、「作者が構成に意を用いて、いわゆる小説の世界を展開して見せるといようなものではなく、あくまで事件そのものを伝えるという記録性にその特徴がある」（竹田 1964：392-393）とされる。それ故、『搜神記』に載せられている盤瓠犬祖神話も、伝承の素材としてのそれ相当の現実性の裏づけがあったと推定できる。そう

であるからこそ、かかる槃瓠犬祖神話は、中国の歴代王朝が編集を依頼した多くの正史の中にもたびたび登場してくる<sup>16)</sup>。これらの正史は、華南の辺境を中心に分布・居住するヤオ族に代表される種々の少数民族の祖先の動静を簡略ではあるが、非常に精度の高い知見で記されている。

ところが、24正史の中でも第3番目の正史にあたる范曄撰『後漢書』(432年ころ成立)では、ヤオ族の祖先が記載されている「南蛮・西南夷列伝」においては、いささかその記載の方法が異なっている。つまり、先行の『史記』や『前漢書』では南方に分布・居住する少数民族の祖先の地理的位置と、当時起こった主要な歴史的事件が羅列的にとりあつかわれているが、『後漢書』の場合、歴史的な事件に先だて、冒頭部分に、多くの民族集団の祖先の起源を物語る神話や伝説を記載するという、大変注目すべき特徴がみられるようになる。この点は、『史記』および『前漢書』が成立した時代から『後漢書』の成立した時代までの約400年間に、支配者階級である漢民族の間に現在の少数民族の祖先に該当する集団に関する知識などの情報が飛躍的に増大したことによると看做される(竹村 1981: 229)。そこで、『後漢書』巻116列伝第76「南蛮・西南夷列伝」の長沙・武陵蛮の冒頭部におかれている槃瓠犬祖神話を検討していくことにする。『後漢書』の長沙・武陵蛮の冒頭では、

昔高辛氏有犬戎之寇、帝患其侵暴、而征伐不克、乃訪募天下有能得犬戎之将呉將軍頭者、購黄金千鎰、邑万家、又妻以少女。時帝有畜狗、其毛五采、名曰槃瓠、下令之后、槃瓠街人頭、造王闕下、群臣怪而診之、乃呉將軍首也。帝大喜、而計槃瓠不可妻之女。又無封爵之道、議欲有報、而未知所宜。女聞之、以為帝皇下令、不可違言、因請行；帝不得已、乃

以女配槃瓠。槃瓠得女、負而走入南山、止石室中、所処險絶、人跡不至。於是女解去衣裳、為僕鑿之結、著独力之衣。帝悲思之、遣使尋求、輒遇風雨震晦、使者不得進。經三年、生子一十二人、六男六女、槃瓠死后、因自相夫妻。織績木皮、染以草實、好五色衣服、制裁皆有尾形。其母后婦、以狀白帝、於是使迎諸子。衣裳斑斕、語言侏離、奴入山壑、不東平曠；帝順其意、賜以名山広澤。其后滋蔓、号曰蛮夷、外痴内黠、安土重旧、以先父有功、母帝之女、田作賈販、無関梁符、傳租税之賦、有邑君長、皆賜印綬、冠用獮皮、名渠師曰精夫、相呼為峽徒(下線——筆者註)。

[宋] 范曄撰『後漢書』南蛮・西夷列伝と記されている。全体としては上記の『搜神記』記載の槃瓠神話と同内容、つまり両者は同一の物語の異なる所伝であると推定できる。しかし詳細に検討すれば相違点も存在する。その最大のものは、『搜神記』では槃瓠が虫から犬に変身したという槃瓠犬の出生譚に関する内容が欠落していることである<sup>17)</sup>。

また槃瓠犬祖神話は、黄帝の曾孫である高辛帝の時代とされるが、『搜神記』では高辛帝の名称が高辛氏とのみ記され、帝という称号はみられない。かように、『後漢書』の記述は正史という性格のためか、『搜神記』の記載よりも、より具体的・正確に記されている。同様のことは、犬の名称に関しても『搜神記』にみられるように、槃の字が盤と同音異字になっているのではなく、文中の下線部に関して槃瓠と記されているように、正確に記されている。この点は、槃瓠が首を取る敵国を戎呉ではなく犬呉としているのも同様である。

さらに、南方の山中の石室で生活を開始した後、6男6女の子供を出産している。だがその年月は『搜神記』では6年、『後漢書』では3年と違いがみられる。このように両著では6年、

3年という期間の相違が存在する。しかし、両方の期間内に合計12名の子供を一般の人間では生産することが不可能である<sup>18)</sup>。かかる点は、これらの子供たちが犬と人間との間に生まれた子供であることを暗ににおわせているものと考えられる。かように、『搜神記』および『後漢書』にみられる槃瓠犬祖神話に関して、主要な相違点を指摘し、検討を加えた、かかる点をより明確にするために、これら両著および前述の『魏略』に記載されている槃瓠犬祖神話の主要部分の比較を行なうと第1表のようになる。

2) 槃瓠神話の特長

槃瓠という犬が皇帝の娘（姫）と結ばれ、6男6女をもうけ、その子供たちがヤオ族の子孫であるという、槃瓠犬祖神話（略して槃瓠神話と称されることが多い）は、ヤオ族の間に伝承している神話であった。かかる神話の成立過程は前項でも分析・検討したが、神話上であるが、自らの集団の祖先が支配者である漢民族の皇帝の窮地を救い、その褒美として姫を嫁としてもらったという相互依存関係を最大限に活用することで、自らの生活権を保障してもらおうと同時

に、その生活空間も拡大していったといえよう。

以上のように要約される槃瓠犬祖神話はその内容において、どのように表象されるのであろうか。かかる槃瓠犬祖神話の主要構成要素に分解することで、槃瓠犬祖神話の特色を分析・検討していくことにする。具体的には前項で紹介した槃瓠犬祖神話のうち、既出の第1表にみられるように、断片的にしか知られない『魏略』記載の槃瓠犬祖神話を除外し、『搜神記』と『後漢書』両書記載の槃瓠犬祖神話を史料とする。両書の記載内容から槃瓠犬祖神話は、順を追って次のような構成要素に分解できる。

- ①蛮夷（ここではヤオ族）の祖先となるべき、虫→犬という異常な出生の物語と皇帝に対する隷属的關係。
- ②槃瓠が中国の皇帝を脅かす有力な夷敵（戎呉または犬戎）の首を取るという、支配者である漢民族の皇帝に対する勲功。
- ③その勲功に対する褒賞と共に、年少の娘（姫、『後漢書』では公主と表現）を嫁として与えられる。つまり、人間と犬という異なる社会体系間の縁組の成立。

第1表 槃瓠犬祖神話の主要部分の比較

事項	『魏略』	『搜神記』	『後漢書』
成立期	3世紀	4世紀中（16世紀復活）	5世紀後半
撰者	魚豢	干宝	范曄
皇帝	高辛氏	高辛氏	高辛帝
槃瓠の由来	もの → 犬	虫 → 犬	無
外敵	記載なし	戎呉	犬戎
褒賞	記載なし	金千斤、1万戸の封土、娘（姫）	錢千両、1万戸の采邑、年少の公主
行先	記載なし	南山の石室	南山の石室
搜索時の状況	記載なし	風雨、山々の震動、霧	風、雨、地震
経過	記載なし	6年	3年
子供	記載なし	6男6女（夫婦となる）	6男6女（夫婦となる）
子供の状態	記載なし	言葉通じない、しゃがんで食事	ちんぷんかんぷん
恩賜物	記載なし	大きい山、広い沼	大きい山、広い沼

〔出典〕『魏略』、『搜神記』、『後漢書』より作成

- ④人里離れた南方の山中の石室での犬と姫との共生。
- ⑤ヤオ族の祖にあたる6男6女の出産（人間では考えられない短期間の多人数の出産）。
- ⑥6年あるいは3年という槃瓠の人間より早い死亡。
- ⑦6男6女が互いに夫婦になるという同族の近親結婚。
- ⑧槃瓠の体毛と同様の5色の衣服を着用し、犬の尾の形状をした衣服を着用するという、漢民族との生活様式の相違。この点に関しては、『搜神記』では言葉もよくわからず、しゃがんで飲食すると明記。
- ⑨山地と沼地を与えられるという生活環境の区別（平地は漢民族が居住）。
- ⑩皇帝から身分と種々の特権（通行手形、道中手形の不要、および租税の免除など）の保障。

以上の10項目の構成要素に分解できる槃瓠犬祖神話の特長を端的に表現すれば、ヤオ族という特定の民族集団のみで、自己完結する閉鎖型の神話ではないということである。つまり、あくまで神話上なのであるが、自らの民族集団の存立に関連する地位や権利を、支配者階級である皇帝との関係において、秩序づけたうえで、正当化しているという事実である。この点は、中国に分布・居住する他の少数民族とりわけ西南中国に居住するミャオ族やトン族あるいはプイ（布依）族などにはみられない特色だといえる<sup>19)</sup>。

それではどのような理由で、支配者階級である漢民族の皇帝から地位や種々の特権を享受することができたのであろうか。槃瓠神話においては、槃瓠という犬が上記②の構成要素にみられるように、皇帝の窮地を救ったとされている。それ以外に、ヤオ族の祖先が居住していたとされる、『搜神記』の槃瓠犬祖神話の末尾に出てくる梁漢、巴蜀、武陵、長沙、盧江などの諸郡

の地域（現湖南省）は、かつて長沙蛮あるいは武陵蛮など荆蛮と総称されていた集団が居住していた土地であった（田畑他 2001：19）。この地域は、華北の中原に居住する漢民族からは蛮夷未開の土地と看做されていた。しかし、さらにその奥に位置する現在のヤオ族の居住中心地となっている貴州省と雲南省にまたがる雲貴高原のように、中原の文化が及ぶのがおくれたのではなく、早くからかかる文化が浸透していた。

しかるにその一方において、かかる荆蛮と総称された民族集団が居住していた地域は、前述の雲貴高原につながる高峻な山地が展開していた。それ故、現在でも山棲みの少数民族の生活空間として、中原に起源をもつ漢民族の生活空間とは隔てられた独自の世界を形成していた<sup>20)</sup>。以上のような社会的状況であったため、華北の中原に起源をもつ漢民族主体の平地型の集団と、山棲みの山地型の集団の両社会が共に共存し、生活できるような社会システム構築の必要を両集団は感じとった。その結果生じたのが、槃瓠犬祖神話であるといえよう。

上述したような分析視角は、西南中国を含む華南山地の少数民族研究のわが国における開拓者の1人である白鳥芳郎（白鳥 1965、蒲生・大林・村武 1967：78-86）の指摘ともほぼ一致する見解でもある。

白鳥芳郎は、山地民と平地民の接触によって、ある集団は山地民族としての生業形態の特徴をより多く保有するが、他の集団はより多く平地民としての文化的要素を残しているなど、両民族集団の混合の度合いによって種々の様相がみられると述べる。そして、かような山地民および平地民という2つの相異なる集団が接触する地域にあっては、1つの民族集団の内部に、2つの文化的要素がみられると指摘する。つまり、このような現象は、前述の山地民が居住する山



岳地帯と平地民が分布する平地地帯の中間地帯に居住する民族集団の中に多く見受けられるという。それ故、かかる中間地帯に分布・居住する民族集団に対しては、固定した1つの性格を与えることができないので、その保持する文化内容や社会的特徴に関しても民族として統一した概念を与えることを躊躇せざるを得ないと論じる<sup>21)</sup>。槃瓠犬祖神話を有するヤオ族も、かかる民族集団の代表であると看做している。

上述の事例として、ヤオ族の分派集団である藍院蛮があげられる<sup>22)</sup>。その内容を構成要素に分析すると、次のようになる。

- a. 藍院蛮は悪霊を恐れ、悪霊を遠ざけるための儀式がよく行なわれる。
- b. 藍院蛮は犬の直裔であると称し、祖先を槃瓠と呼んでいる。
- c. 藍院蛮は、水の精、亡霊、心の精、雲の精、畑の精、囲炉裏の精を崇ぶ。つまり、彼らはこの世に存在するあらゆる要素は強力な精霊よりつくられたと信じている。
- d. 藍院蛮は洪水伝説を信じ、兄妹が大きな山（崑崙）の頂きにたどりつき助かったとする。
- e. そこで兄妹は亀に会う。亀は2人の結婚をすすめる。しかし兄は怒って結婚を拒絶する。
- f. 出会った竹も兄妹に結婚をすすめる。しかし同様に兄は怒り、結婚を拒絶する。
- g. 最終的に、兄妹は結ばれ、妹はカボチャを生む。
- h. カボチャの種子をまくと、蛮と泰が生まれた。
- i. 妹の間違いから、平地にまくはずの蛮の種子を山地にまいてしまった。そのため、泰が水田地帯の沃野を占領し、蛮は不毛の高地に住むことになった。

かかる藍院蛮にみられる神話の特色は、上述

で指摘した2つの相異なる文化的・民族的特徴の混合を物語っている。すなわち、上記のbにみられたように、藍院蛮は槃瓠犬祖神話を有している。そしてそれと同様に、上記のd、e、fにみられるように、亀や竹の話に伴う洪水神話をもっている。前者の槃瓠犬祖神話は、華南地方のヤオ族<sup>23)</sup>などに圧倒的に濃厚に分布する神話であり、山岳地帯の住民の特徴といえる。それに対して洪水神話のほうは、むしろ東南アジアに広範囲にわたって分布する平地地帯の住民、とくにタイ系諸族の中に比較的多くみられる。それ故、洪水神話は平地民に関係を有する神話であるといえる。

しかも、藍院蛮の神話においては、かかる山地民と平地民との各々の特色をもつ、槃瓠犬祖神話と洪水神話の両神話が同時に出現している。さらに、漢民族の始祖神とされる伏羲<sup>24)</sup>と女媧<sup>25)</sup>の神話に相当する兄妹が出現し（e）、その間に生まれたカボチャ（g）から蛮と泰が誕生する（h）。つまり、1つの祖先神話の中から蛮（ヤオ族）と泰（漢民族）の2つの民族が誕生したことになる。このことは、藍院蛮と称された民族集団が蛮、泰の2つの民族集団に接触し、混合することによって構成された複合民族であることを物語っている。

以上白鳥芳郎が主張するように、ヤオ族の分派集団である藍院蛮が蛮（ヤオ族）と泰（漢民族）の2つの民族集団によって構成された複合民族であると考えた場合、ヤオ族が漢字をはじめ漢文化を早い時期から習得するようになったことに対して、非常に説得力をもつ解釈といえよう<sup>26)</sup>。

### 3) その後の槃瓠神話の変遷

前項では1～3世紀すなわち後漢の時代にはじめて志怪小説を収集した説話集や史書（正史など）において、槃瓠犬祖神話が登場したことを論じ、その内容について原典に基づいて分析・

検討を加えた<sup>27)</sup>。その結果、槃瓠犬祖神話は、支配者階級である皇帝つまり漢民族社会との相互依存関係——皇帝の外敵の首を取った槃瓠に対して、その褒賞として金銭および封土の他に娘（姫）を与える——を、神話上の話という限定条件があるものの、理念的に規定している、という非常に特異な意味を有していた。かような漢民族社会との相互依存関係を結んだのは、他の少数民族の間では類をみないものであった。

さらに本稿では、敢えて論点が分散することを避けて、詳細な分析・検討を試みる作業は行なわれなかったが、同時代すなわち後漢の時代に、槃瓠犬祖神話を除く、他の少数民族の祖先に関する神話の大半は、例えば、哀牢夷<sup>28)</sup>の場合のように、その担い手である民族集団の消滅に伴い、伝承として後世に伝わらなかった。この点に関して槃瓠犬祖神話が後世にまで、ヤオ族という特定の民族集団のみに、伝承したという特異な特徴が認められる。

しかしながら、後世まで槃瓠犬祖神話が伝承されるとしたが、後世に入るとその伝承の内容が大きく変化するのである。すなわち、槃瓠犬祖神話は、近世までほとんど記録されることがなかったこと、12～13世紀になると、漢民族の南中国の少数民族に対する呼称が全面的に更改され、それ以降になると、以前の民族集団の名称を固定することが非常に困難になったことがあげられる。

『南史』（630年ごろ成立）では、次のような記述がみられる。

荆、雍州蛮、盘瓠之后也、種落布在諸郡县。宋時因晋於荆州置南蛮、雍州置寧蛮校尉以領之。孝武初、罷南蛮併大府、而寧蛮如故、蛮之順府者、一戸輸谷数斛、其余無雜調。而宋人賦役嚴苦、貧者不復堪命、多逃亡入蛮。蛮無徭役、強者又不供官税、結党連郡、動有数百千人、州郡力弱、則起為資賊、種類稍多、

戸口不知他、所在多深險。居武陵者有雄溪、淞溪、辰溪、酉溪、武溪、謂之溪蛮。

〔唐〕李延寿撰『南史』卷79、  
列伝69「東貊、下」

以上の『南史』の記述から、その後の槃瓠の様子がうかがえる。その要点を箇条書きにすると、次のようにまとめられる。

- ①後漢時代（25～220年）に長沙蛮あるいは武陵蛮と称されていたが、それに代えて荆州蛮あるいは雍州蛮という名前が槃瓠の後裔とされる。
- ②荆州と雍州にそれぞれ出先の役所（南蛮校尉、寧蛮校尉）を設置し、彼らをそれぞれの役所に編入しようと努めたが、成功しなかった。
- ③蛮族に対する課税は少しか皆無であった。しかし一般の漢民族のほうは課税が厳しかった。
- ④そのため、多くの漢民族が蛮夷化し、蜂起するものもあった。
- ⑤蛮族の種類は多種多様なので、その戸数や人口数などは知るべくもなかった。
- ⑥当時既に多くの民族集団に分化し、漢民族側では雄溪、辰溪というように、地名あるいはそれに付随する名称で区別して呼んでいた。また、かつての武陵蛮の後裔は五溪蛮と称された。

以上の6項目に要約されるが、前述したように槃瓠という名称は登場するが、槃瓠犬祖神話に関する記述がまったくみられない。それ故、荆州蛮や雍州蛮の間ではかかる槃瓠犬祖神話がどのように語られていたかは不明であるといわざるを得ない。しかしながら、上記の要約②、③などからも判明するように、漢民族と蛮族との間の相互依存関係は完全なものとはいえないが、『搜神記』や『後漢書』の記載と同様に、基本的には機能していたと看做される。この点

は『南史』には登場しないが、槃瓠犬祖神話がこれらの集団の間で生き続けていたものと推察できる。なおこの当時、かかる地域の山地住民の出自をすべて槃瓠に求めている点も見逃せない。つまり、この種の起源神話を伝承する集団が広大な地域に分布していたことを物語っているのである。

下って隋代（589～618年）および唐代（618～907年）に入ると、槃瓠を祖先とする集団に関する情報が極端に少なくなる。かかる点は、この時代になると漢民族の関心が、南詔国（雲南）や安南に向けられるからであると推定できる。例えば、636年に成立した『隋書』には、

尚書：“荆凡衡陽惟荆州。”上当天文、…  
 （中略）…諸蛮本其所出、承盤瓠之后。故服章多以班布為飾。其相呼以蛮、則為深意。…  
 （中略）…長沙郡又雜有夷蜒、名曰莫徭、自云其先祖有功、常免徭役、故以為名。其男子但著白布禪衫、更無巾袴、其女子青布衫、班布裙、通無鞋屨、婚嫁用鉄鈷順為聘財。武陵、巴陵、零陵、桂陽、澧陽、衡山、熙平皆同焉  
 （下線——筆者註）。

〔唐〕魏徵ら撰『隋書』卷131、志第26 地理下と記されている。この記述から隋代においても前代と同様に、長沙郡を中心とする湖南省の山間部には、自らの民族の特権を、槃瓠という民族起源神話に依存する集団が存在していたことが分かる。なお、彼らの名称が下線部にみられるように莫徭つまり「徭役をもたないヤオ族」という、彼らの特殊な地位を示す名称で呼ばれていることは注目に値する。すなわち、当時既にかかる地域は漢民族からヤオ族と識別された民族集団が存在していたことになる<sup>29)</sup>。それ故、隋代の「莫徭」は、既に述べたように4～5世紀の「溪蛮」と、11～12世紀にかけて登場するヤオ（徭、徭、瑤、瑶などと表記）族との中間

の位置を占め、その解明の鍵を握っていると思われる。

同様の内容は、北朝（386～534年）の魏・齊・周・隋の歴史を1つにまとめた正史である『北史』の中にもみられる。そこには、

蛮之種類、盤瓠之后也、在江淮之間、種落滋蔓、布於数州、東連寿春、四通巴蜀、北接汝穎、往往有焉。其於魏氏、不甚為患、至晋之末、稍以繁昌、漸為寇異矣。自劉石乱后、諸蛮無所忌憚、故其族類漸北遷、陸渾以南、滿於山谷、宛洛蕭条、略為丘墟矣。

〔唐〕李延寿ら撰『北史』卷95 蛮僚伝

しかしその内容は、前述の『隋書』と同様あるいはそれよりも簡略化されたものとなっている。

宋代とくに12・13世紀になると、既に論じたように、南中国を中心に分布・居住する少数民族の歴史にとっては大きな転換期を迎える。その第1は、従来の「蛮」、「蛮夷」などといった概括的な総称や、「五溪蛮」などに代表される地名に関連した呼称に代って、「徭」、「苗」など現在使用されているか、あるいは近年まで用いられてきた民族ごとの名称が文献に登場したことである。第2としては、長沙郡を中心とした湖南省周辺に分布・居住していた民族集団が、この時期から西方に大規模に移動していった点があげられる<sup>30)</sup>。

このように、一大転換期を迎えた宋代では槃瓠はどのような形式で記載されているのであろうか。12世紀の成立と考えられている『溪蛮叢笑』の自序では次のように記されている。

五溪之蛮皆盤瓠種也。聚落区分、名亦随異、沅其故壤、環四封而居者有五、曰猫、曰徭、曰獠、曰獠、曰獠、風声習氣、大略相似、語言服食率矣乎。

〔宋〕朱輔『溪蛮叢笑』

この書によると、王溪の蛮族すなわち猫、徭、

僚、獐、狢猪はすべて槃瓠から出たものである。これらの5つの民族集団を現在の名称にあてはめてみると、ミャオ族、ヤオ族、リャオ族<sup>31)</sup>、チワン族、コーラオ族になろうと思われる。しかし現在ではヤオ族以外に槃瓠犬祖神話は伝承されていない。

このように、近代以前の漢籍史料を渉猟しても、槃瓠犬祖神話と文献上の具体的な事実関係は不明のままになる。それが判明するのは20世紀以降になって収録された、ヤオ族の分派集団の1つである過山ヤオ族に伝わる評皇券牒あるいは過山榜と称される文書の分析によってなのである。

なお、槃瓠犬祖神話は、江戸時代中期に成立した江戸時代を代表する百科辞典である『和漢三才図会』(1712年)の中にもほぼ正確に記載されている。

## 註

1) 同様にミャオ族も種々の分派集団に分かれるが、過山ヤオ族のように移動生活を送っているのは「白ミャオ」族と称されている女性が白色の民族衣裳(スカート)を着用している集団に限定される。かかるミャオ族の分派集団は、インドシナ半島北部の山岳地帯ではモン(Hmông)族あるいはメオ(Meo)族などと呼ばれている。

なお、これらインドシナ半島北部の山岳地帯に居住するヤオ族やミャオ族は政治的圧迫を受けることが多い。それ故、難民としてアメリカ合衆国やカナダなど海外に亡命する人々も増加し、大きな政治問題化している。

2) その後、中国の近代化政策の下に市場経済化が進展する中で、ほとんどの少数民族居住地区に設定されていた対外「未開放地区」はその指定が解除された。西南中国では、現在すべての県で対外「未開放地区」の指定が解除された。しかし解除されたといっても、外国人が自由に訪問できるのは、県の人民政府所在地(県城と称される)、鎮や郷などの地方中心集落および観光客誘致用に解放した、いわゆる観光モデル集

落のみで、ヤオ族が居住している集落(一般には寨と呼ばれることが多い)に出かけるには種々の許可を必要とし、事実上訪問することが困難である。そのような状況なので、中国国内に分布・居住するヤオ族に関しては、筆者らの雲貴高原東半分を占める貴州省内でのフィールドサーヴェイ(田畑・金丸 1995)以外、日本人研究者を含む外国人研究者のフィールドサーヴェイは実施されていない。

3) 筆者らの著作(田畑・金丸 1995)においては、「盤ヤオ」族の他、「紅ヤオ」族、「青褲ヤオ」族、「白褲ヤオ」族の典型的な集落をとりあげ、フィールドサーヴェイに基づく現状分析主体の検討を行なった。

4) 他のヤオ族の分派集団は、原初形態(prototype)としては過山ヤオ族同様、焼畑農業や狩猟が生業の中心であったと推定できる。しかしこれらの分派集団は、移動の途中において、焼畑耕地として利用した農地が農業に適しているのであれば、その土地に定着し、棚田や段々畑などの耕地を造成することになったと思われる。狩猟に関しても同様に、適地がみつければそこで定着を開始した。

しかし、耕地に適した比較的海拔高度の低い場所には先に入り込んだミャオ族など他の少数民族が占有しているので、ヤオ族の場合定着したといえども生活条件の劣悪な高所に集中することになる。例えば、ヤオ族やミャオ族などの山棲みの少数民族がほぼ同一地域に分布・居住している雲貴高原東部の山間部においては、低所から高所にかけて、トン(侗)族、ミャオ族、ヤオ族の3民族による海拔高度差をメルクマールにした住み分け現象が明確に認められる(田畑・金丸 1995: 24)

なお、過山ヤオ族およびミャオ族の一部(「白ミャオ」族)がこのように絶えず移動生活を余儀なくさせられることになったのは、共に生業形態の中心が焼畑農業と狩猟であること、ヤオ族およびミャオ族の分派集団の中でも、元王朝時代から清王朝時代(1279~1911年)にかけて、朝廷に対して非常に厳しい反抗や抵抗を試みたことの2点が大きく作用している。とりわけ後者の反抗や抵抗の結果、過山ヤオ族および「白

「ミャオ」族に対して、とくに漢民族の圧迫が激しく、両分派集団は国境を越えてインドシナ半島北部の山岳地帯にまで移動せざるを得なくなった。国境を越えた「白ミャオ」族の生業を中心とした現状分析に関しては、金丸良子の研究（金丸 2005：281-364）が参考となる。

5) かかる点は、「白ミャオ」族を含めて、伝統的に移動生活に従事していたミャオ族が、固有の文字を所有していないのとは大きな相違点であるといえる。

6) この点は本文で言及してきた事実に矛盾するような印象を与える。つまり、過山ヤオ族は「白ミャオ」族と同様もっとも激しく朝廷に反抗および抵抗を繰り返した。その結果、徹底的な弾圧を受けることになり、移動せざるを得なくなった。ところが、過山ヤオ族は評皇券牒に代表される文書を皇帝から賜わるという形式を採用している。一見このように矛盾する事実は次のように解釈できる。

ヤオ族を含む華南に分布・居住していたとされる少数民族は後漢時代（25～220年）になると、武陵蛮と総称されることになる。その武陵蛮の子孫の一員とされるヤオ族には、いわゆる槃瓠犬祖神話という神話が伝承されている。つまりヤオ族は、神話上、漢民族の姫を妻とした槃瓠と呼ばれる犬が祖先であるとするのである。過山ヤオ族は、当時の朝廷に対して激しく反抗・抵抗を試みるのであるが、その一方において、かかる槃瓠犬祖神話を利用することで、皇帝すなわち漢民族の支配階級と深いつながりをもつことを強調する。そして、そのことによって、漢民族支配階級との相互依存関係を最大限に活用したと、推定できる。端的に表現すれば、支配者階級である漢民族との相互依存関係をうまく利用して、自らの生活空間を拡大したといえよう（田畑他 2001：164-165）。

7) 以下本文に引用する槃瓠についてのほとんどの神話は、その原典がヤオ族の過山榜を収録した著作の附録（《過山榜》編輯組 1984：117-123）の史料集に集められている。個々の原典史料にあたる労を省略してこれを利用した。

8) 晋代（256～426年）の人といわれる。

9) 本書は大部分が消失しており、全体は伝わっ

ていない。該当部分は唐（618～907年）の欧陽詢撰『藝文類聚』巻1の中に引用されている。

10) 同様に、盤古が記載されている天地創造神話である明（1368～1644年）の周遊撰『開闢衍繹通俗志伝』付録『崑仙天地説』の中では創造神つまり盤古が左手に鑿をもち、右手に斧をもって天地を彫りきざんで創造しているという。天地鑿造型神話にも登場する（伊藤 1996：30-31）。

11) 本書は大部分が散逸し、全体が伝わっていない。該当部分は清（1644～1911年）の馬驥撰『釋史』巻1の中に引用されている。

12) 同様の巨人死体化生型の天地創造神話は、南朝齊（479～502年）の祖沖之撰『述異記』巻上の中にもみられる（伊藤 1996：29-30）。

13) 中国の神話伝説上の皇帝黄帝の曾孫。帝嚳とも称される。なお黄帝とは軒轅氏ともいう。蚩尤を誅罰し、炎帝に代って天子になった。土徳の持ち主とされる。

14) 元来は30巻本の説話集であった。しかし、かかる原本は一時消失し、その行方が不明であったが、16世紀に復活した、そのときには20巻本と8巻本の2系統がみられた。内容的には20巻本が原典に近いとされる。槃瓠犬祖神話は20巻本の第14巻に掲載されている。

15) 以下の大意に関しては、部分的に難解な箇所が存在することもあり、既往の現代語訳（干宝、竹田訳 1966：259-262）を参考にした。但し、竹田晃訳では、槃瓠と結婚した王の娘が子供を生むのであるが、その年月を3年としているが、本文に引用した原典に従って6年とあらためた。

16) 竹村卓二によると、ヤオ族を筆頭とする南中国に分布・居住する少数民族に関する情報が真実味と具体性を帯びて支配民族である漢民族に伝達されるのは、正史の魁を担う漢漢の司馬遷の『史記』（BC. 91年ごろ完成）およびそれに続く、班固の『前漢書』（82年ごろ成立）以降であるという（竹村 1981：329）。

17) かかる点は、『搜神記』が志怪小説、『後漢書』が歴史書であることより生じた。干宝および范曄両撰者の視点の置き方の相違によるものと解釈できよう。

18) 毎年2名ずつ出産すれば、6年間で12名の子

供が出産できるが不可能に近い。

- 19) そのようなこともあり、ヤオ族は少数民族では唯一である漢字を習得することに励んだと推定できる。
- 20) 漢民族が大挙してかかる地域に侵出したのは、既に指摘したように、元王朝(1279~1368年)以降のことで、とくに次の明王朝から清王朝(1368~1911年)にかけて、屯田兵として多くの漢民族がこの地域に入植しだした。その結果、ヤオ族・ミャオ族は徹底的に反抗・抵抗を企てたが、すべて漢民族の弾圧にあい、より西方に位置する雲貴高原の山間部に逃げたのであった。
- 21) それ故、かかる中間地帯を主要な居住地としてきたミャオ族やヤオ族などには、分派集団というサブグループが形成されることになるのである。
- 22) かかる事例は白鳥芳郎が自ら調査したのではなく、アバディ(Abadie)の著作(Abadie, M. 1924, 民族学協会訳 1944: 152-153)から引用している。
- 23) 白鳥芳郎は他にショオ(畚)族、ミャオ族にも槃瓠犬祖神話が存在するという(白鳥 1965、蒲生・大林・村武 1967: 129)。しかしながら管見では、ショオ族の一部に槃瓠犬祖神話を伝承するものも存在するが、ミャオ族に関してはかかる神話を伝承するものはいない。
- 24) 竜身の雷神の子で、人首竜身となって出現する。民に農漁牧を教え、厨房に犠牲を貯えたのがその名前の由来という。中国では女媧と共に人類の始祖神とされる。
- 25) 中国の開闢期に生じた天地の破局を、五色の石や亀の足で補修した、黄土で人類を造った人首蛇身の神。伏羲の妻として人類を生む。
- 26) 白鳥芳郎は、最終的に華南地方の主要民族集団を、第1に山岳民族としてのショオ族、ミャオ族、ヤオ族の各系の集団、第2に山麓丘陵地帯において平地民(漢民族)と接触してその生活形態を大きく変容させたミャオ族、ショオ族、ヤオ族の各集団、ならびに山地民と接触して変容を生じた平地民タイ系の民族集団、第3に平地民とくにタイ系諸民族または漢民族によって代表される稲作民族の3つのタイプを想定して

いる(白鳥 1965、蒲生・大林・村武 1967: 133)。

- 27) しかしながら、『後漢書』の場合、実際に記述されたのは下って4~5世紀であった。また『搜神記』に関しては既述したように、原本が一時消失していたが、16世紀末に復活された。
- 28) 漢代(BC. 206~BC. 221年)に西南中国に住していたとされる少数民族。現在では「夜郎自大」という俗諺にその名称が残っているだけである。哀牢夷の「九隆」と称される始祖神話は、范曄撰『後漢書』巻116 列伝第76 南蛮・西南夷伝の中に登場する。その大意は次のようである。大意の一部は伊藤清司の現代訳(伊藤 1996: 299)「竜の末裔」を参照した。

哀牢夷の祖先に沙壹という女性がいた。沙壹は哀牢山(雲南省)に住み、近くの川で魚を捕っていた。その時、水中で沈木に触れて異様な感じをもった。その結果妊娠し、10ヶ月後に10人の男の子を出産した。

その後、例の沈木が竜に変化し、突然水中から現われた。竜が「自分のために生んだ子供らは全員どこに居る」というのを聞いた。地上に現われた竜の姿をみた10人の子供のうち、9人はびっくりして逃げ去った。しかし、末子1人のみ逃げず、竜の背に向けて坐した。そこで竜は、その子供をなめまわした。沙壹らの言葉では、背中を「九」、坐ることを「隆」という。そのため、かかる末子は「九隆」と呼ばれることになった。

そしてその後、九隆は成長するにつれて、父親の竜になめられた靈験をもつことから、才智卓越していることで、一致して王に推された。

またその後のことであるが、1組の夫婦が哀牢山麓に住み、同様に10人の女の子を出産した。九隆の10人の兄弟はこの10人の女の子とそれぞれ結婚し、後世の子孫が増加した。彼らは全員身体に竜文を彫り、尾の付いた衣服を着用していた。

九隆の死後は代々世継を立て、各地に小王を分置した。彼らの集落は山間の溪谷に散在し、その地勢は「絶域荒外、山川阻深」であった。中国(漢民族)とは長い間交渉がなかった。

以上の哀牢夷の九隆神話に関しては、松本信

- 廣の研究（松本 1949）が存在する。本稿でもかかる松本信廣の研究成果を参考にした。
- 29) かかる点に関しては、中国人研究者（江 1948：74）は莫徭がヤオ族の民族名称の最初であることを考証している。
- 30) その最大の理由は、宋王朝（960～1279年）による蛮族討伐の名をかりた華南地方への侵出であった。この蛮族討伐は次の元王朝（1271～1367年）、明王朝（1368～1644年）、清王朝（1616～1911年）にも連続して実施された。
- 31) コーラオ族の祖先を僚人と称されていた集団にあてることがある（田畑他 2001：178）。それ故、リャオ族はコーラオ族の分派集団かとも思われる。

#### 引用文献

- Abadie, M(1924): 《Les Races du Haut-Tonkin de Phong-tho a Lang-son》 Paris,民族学協会訳（1944）：『トンキン高地の未開民』三省堂
- 伊藤清司（1996）：『中国の神話・伝説』東方書店
- 岩田慶治（1960）：「北部ラオスの少数民族——特にヤオ族について——」『史林』43-1、70-103頁
- 《過山榜》編輯組（1984）：『瑤族《過山榜》選編（国家民委民族問題王種叢書之一、中国少数民族社会歴史調査資料叢刊）湖南人民出版社
- 金丸良子（2005）：『中国少数民族ミャオ族の生業

- 形態』古今書院
- 干宝・竹田晃訳（1964）：『搜神記』平凡社（東洋文庫）
- 江應樑（1948）：『西南辺疆民族論』新華書店
- 白鳥芳郎（1965）：「華南少数民族の生業形態の分析と類型」『中国大陸古文化研究』創刊号 蒲生正男・大林太良・村武精一編（1967）『文化人類学』角川書店、121-133頁所収
- 白鳥芳郎編（1978）：『東南アジア山地民族誌——ヤオ族とその隣接種族（上智大学西北タイ歴史文化調査報告）』講談社
- 竹村卓二（1981）：『ヤオ族の歴史と文化——華南・東南アジア山地民族の文化人類学的研究』弘文堂
- 田畑久夫（2004）：「槃瓠神話の変化」『アジア遊学』67、勉誠出版、72-83頁
- 田畑久夫（2005）：「ヤオ族の評皇券牒（Ⅰ）——槃瓠神話と移動経路を中心に——」『昭和女子大学大学院生活機構研究科紀要』14、1-19頁
- 田畑久夫・金丸良子（1995）：『中国少数民族誌 雲貴高原のヤオ族』ゆまに書房
- 田畑久夫・金丸良子・新免康・松岡正子・索文清・C. ダニエルス（2001）：『中国少数民族事典』東京堂出版
- 松本信廣（1949）：「哀牢夷の所屬について」『東洋学報』32-3、26-54頁

（たばた ひさお 生活機構学専攻 教授）

受理年月日 平成17年9月30日  
審査終了日 平成17年12月2日